

又瑞月が出鱈目を
 彼方此方に出るであらう
 文盲學者や仇人の
 如何に天地の神々が
 神より受けし魂の
 唯一言の口述も
 神の苦勞も白浪の
 心定めぬ人々の
 世界に著者は多くとも
 口述筆記するものは

吐くと影口叩くもの
 著述の苦勞の味知らぬ
 如何で悟らん此苦勞
 我身を助けたまふとも
 意志と想念光らねば
 安くなし得るものでない
 上に漂ふ浮草の
 囁きこそはうたてけれ
 一日に數萬の言の葉を
 開闢以來例なし

作りし文の巧拙を
 許しもなるが一概に
 下らぬ屁理屈並べ立て
 神によそへて歌ふなど
 神の教の中にある
 我身の慾に絆されて
 柵から牡丹餅おち來る
 世の立替や立直し
 耳を聳て目を丸め
 そんな事のみ一心に

云々するは未だしもこ
 この瑞月が物好に
 心に積りし鬱憤を
 分らぬ事を云ふ人が
 かゝる汚き人々は
 表面に神を伏し拜み
 時節を待つよなやり方ぞ
 今ちや早ちや書くなれば
 口尖らして讀むだらう
 待ち暮すのは曲津神

世の禍を待つものぞ
 世界に何事無きやうと
 配らせたまひ大本の
 世界の難儀を救はんご
 其御心も知らずして
 人は大蛇か曲鬼か
 あ、惟神々々
 此聖場に寄り集ふ
 まことの光を興へつ、
 天の瓊銓を爽かに

大慈大悲の大神は
 朝な夕なに御心を
 教御祖は朝夕に
 赤心こめて祈りましぬ
 世界の大望待ち暮す
 譬方なき者ぞかし
 神の御前に平伏して
 信徒達の魂に
 耳をば清め目を照らし
 研かせたまひて言靈の

御稜威を四方に輝すべく
 體の骨を痛めつ、
 あ、惟神々々
 豊國姫の大御神
 鎮まりたまふ日の御神
 世の有様を歎きつ、
 あ、惟神々々

守らせたまへど朝夕に
 一心不亂に願ぎまつる
 大國常立大御神
 天津御空に永久に
 月の御神の御前に
 密かに一人願ぎまつる
 御靈幸倍ましましてよ。

(大正二二、五、二九、四四、一四、於天聲社 加藤同子)

||山河草木【寅の巻】終り||

大正十五年一月三十日印刷
大正十五年二月三日發行

山河草木(寅の巻)奥付

定價 壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町大字本宮村小字本宮下
三十二番地

編輯者 北村隆三

京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地

發行兼印刷者 大谷恭平

京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地

發行兼印刷所 天聲社

〔振替大阪六〇五三四〕

不許複製

△豫

告▽

靈界物語

山河草木【辰の巻】

發兌日未定

目

次

序

文

總

說

第一編 盜風賊雨

第一章 感謝組

第二章 古峽の山

第三章	岩	俠
第四章	不聞	銃
第五章	獨許	貧
第六章	噴火	口
第七章	反	鱗

第二篇 地異轉變

第八章	異心泥信
第九章	劇流
第一〇章	赤酒の顔
第十一章	大笑裡
第十二章	天惠

第三篇 虎熊慘狀

第十三章	飲誠團
第十四章	山川動亂
第十五章	饅頭塚
第十六章	泥足坊
第十七章	山嵐

第四篇 神仙魔境

第十八章	白骨堂
第十九章	谿の道
第二〇章	熊鷹
第二十一章	仙聖郷

第二章 均 霈
第三章 義 俠

第五編 讚歌應山

第四章 危母玉
第五章 道歌
第六章 七福神

山河草木(辰の卷)目次終

申込所 丹波綾部町 天聲社

終

274333